

「私と書道」

3年 S.U

みなさんには小さい頃から長年やっている習い事がありますか。女の子の場合、ピアノやバイオリンをはじめとした音楽系や、バレエや新体操、水泳など体を動かす運動の習い事などたくさんあります。

私も小学校一年生から長年やってきている習い事があります。それは書道です。私が行く書道の教室では学年ごとに一番上の位が変わっていきます。中三での一番上は特待生、そして準特待、その下は六段、五段とって初段にいき、その下は段ではなく級になる仕組みです。長年、先生方に教えていただいたおかげで今では毛筆が特待生、硬筆が準特待になりました。私は一枚の半紙に向かって一文字一文字を集中して丁寧に書く事に楽しさを覚えました。また、毎月の課題で審査が行われ、合格すれば一つ上の位に行くことができます。それにより、一生懸命書いた作品が認められたという達成感が得られます。

しかし、ここ最近書道をやっていて楽しくないと感じたり、部活の後で体力と時間をわざわざ使い、なぜ自分はそこまでして書いているのか分からなくなってしまった事がありました。そこで私はなぜ書道を長年やっているのかという事と、なぜ、私は楽しくないと感じてしまうのかという二つの事について考えました。

まず、なぜ書道を長年やっているのかと考えた時に思い浮かぶ理由は次の二つです。一つは教えていただいている書道の先生は母の友人であり、母に勧められた手前、やめづらいという事と、もう一つは唯一長くやっている習い事だから中途半端に終わらせたくないという二つです。私は今まで関わった習い事を比較的すぐに諦めてしまってきました。「あの先生怖いからやめたい。」とか「受験で忙しいからやらない。」という考えでやめてしまった習い事が多いです。しかし、書道だけは九年間もやっているため、私にとっては簡単にやめようとはできないものだと感じました。

そして、もう一つの、なぜ私が長年やっている書道を楽しめないと感じるのか、と言うと、それは人と比べてしまうからです。同じ学年の人で上手い人はどんどん上に上がっていき、気づけば同じ学年の人は数少なくなってしまうことがありました。私はそこから焦りを感じ、字が雑になってしまったり、納得のいく字が書けなくなってしまいました。また、年に数回ある展覧会で同学年の作品を見ると、周りの人よりも下手だと感じてしまいます。そんな時、先生の恩師という方とお目にかかる機会があり、よく周りの人と比べてしまいがちな私にある詩を教えてくださいました。それは、金子みすずさんの「わたしと小鳥と鈴と」です。この詩の最後の方に、「みんな違ってみんないい」という所があります。その方は人と比べる必要は全くなく、その人自身しか書けない独自の優れた字がたくさんあって、どれ一つ同じ字はないんだという事を教えてくださいました。私はそれを聞いた時、先ほど考えていた心情がとても情けなく感じました。

私はそれ以来、「自分は人と比べる必要は全くない。」という事を心に留めています。たまたま、その月の課題が苦手であっても他の所で挽回できるチャンスがあると以前よりも前向きに考えられるようになったと思います。今の時期、なかなか上手いかず上の位に行くことができなくても、自分のペースでこれから書道を長年やっていきたいと強く感じました。

また、長年やってきた書道を海外の方へ教えてみたいという希望を忘れずに書道を続けていこうと思います。